

# これしかないと思うようになるまで考え抜く



ロイヤルホテル社長 蔭山秀一  
かげやま しゅういち

2020年12月13日、恩師である元神戸大  
学学長新野幸次郎先生が逝去された。コロ  
ナ禍でお見舞いに行くこともできず、悲しい  
知らせだったが享年95歳の大往生だった。

結婚式の主賓でご出席いただいたにもかかわらず、卒業後はほとんど挨拶にも行くことができなかったが、前職の三井住友銀行時代に、執行役員昇格時にいただいたお祝いの手紙をきっかけにお会いする機会が増えた。その後は昇格する都度、励ましと良きリーダーになるための心得、参考にすべき書籍などを書き記した手紙をいただくようになった。

学長退任後、阪神・淡路大震災で大ダメージを負った地元神戸の復興に貢献された先生は、関西財界の中でも重鎮と呼ばれる存在であった。そのようなことは何も知らない小職が関西経済同友会の代表幹事になった時には、思いのほか先生にも喜んでいただき、同友会が主催する関西財界セミナーでは小職の発言などに細やかなアドバイスをいただいた。また、先生が主催される3カ月に1回のOB読書会では、リーダーの在り方についているんな面から議論させていただいた。

そして、銀行も卒業して現在のロイヤルホテルの社長になった時、これまでのサラリーマンとは違い、自らの責任で決断をしなければ

ならない立場になったこと、そしてその心得を説いた手紙をいただいた。

「変化も激しくどうなるか簡単に決められない時代には、…これしかないと思うようになるまで考え抜くことが必要です」「謙虚に他人の意見を聞きつつも、自信を持ち果断に決行しなければいけません」

ホテルでは銀行業とは違い、業種柄、それ程大きな決断をする機会もないかと思っていたが、3年に及ぶコロナ禍で大変なダメージを負い、重大な決断を迫られる事態となった。1年半の時間をかけて、3月末に外資系ファンドとの資本業務提携を締結し、新たな形で成長戦略を実践していくことになる。合意までの道のりは平坦なものではなかったが、社内の意志を確認しつつ、粘り強い交渉の結果、ほぼ満足のいく決断ができたと思う。現状の判断としては、考え抜いた自信はあるが、先生はどのように評価してくれるだろうか。

この原稿を書くにあたり数十通に及ぶ先生からの手紙を読み返しているが、どの手紙にも心に沁みる言葉が書かれている。手紙をいただいた時とは全く違った理解が今ならできている。ご存命ならご相談したいことが山のようにある。かけがえのない恩師だった。